

『正法眼藏抄』口語訳の試み

——仏性(十)——

伊藤秀憲

第十二段

趙州眞際大師に、ある僧とふ、「狗子還有佛性也無。」この問の意趣あきらむべし。狗子とはいぬなり。かれに佛性あるべしと問取せず、なかるべしと問取するにあらず。これは鐵漢(2)また學道するかと問取するなり。あやまりて毒手にあふ、うらみふかしとい(3)へども、三十年よりこのかた、さらに半箇の聖人(4)を見る風流なり。

趙州いはく、「無。」この道をききて、習學すべき方路あり。佛性の自稱する無も恁麼なるべし、狗子の自稱する無も恁麼道なるべし、傍觀者の喚作の無も恁麼道なるべし。その無わづかに消石の日あるべし。

僧いはく、「一切衆生、皆有佛性、狗子爲甚麼無。」

いはゆる宗旨は、一切衆生無ならば、佛性も無なるべし、狗子も無なるべしといふ、その宗旨作麼生となり。狗子佛性、なにしてか無をまつことあらむ。

趙州いはく、「爲他有業識在。」この道旨は、爲他有は業識なり、業識有、爲他有なりとも、狗子無、佛性無なり。業識いまだ狗子を會せず、狗子いかでか佛性にあはむ。たどひ雙放雙收(6)すとも、なほこれ業識の始終なり。

此問ノ心地不審也、一切衆生ニ皆有佛性(1)、何トシテ狗子ニ佛性ノ有無(2)今始テ事新(3)シク問スルソト覺(4)タリ、但其子細委被釈也、所詮鐵漢(5)又學道スルカト問取スルナリ云云、此鐵漢ハ佛性ニアタル、佛性又學道スルカト云

この問の意味あいはよ分からぬ。一切衆生に皆仏性が有る。どうして狗子（犬）に仏性が有るか無いかを、今始めてこと新しく問うのかと「不思議に」思われた。もつとも、そのわけは委しく釈かれるのである。結局「鐵漢また學道するかと問取するなり」とある。この「鐵漢」は仏性にあたる。「仏性また學道するか」という意味である。仏性は仏性であるのかとも、また、鐵漢は鐵漢である

心也、佛性仏性ナルカトモ、又鐵漢鐵漢ナルカトモ、學道學道ナルカト問セムカ如シ、

\アヤマリテ毒取ニアフ、(一一一-b) ウラミフカシト云ヘトモ、三十年ヨリコノカタ、サラニ半箇ノ聖人ヲミル風流也云々、此毒手ノ詞、今對于狗子^{イヌ}先業ノ所感ニ依テ、今畜類ノ生ヲ受タリト云様ニキコユ、一旦ハ誠此心地モアリヌヘキカ、但此毒手モ落居スル所佛性ニアタルヘキ歟、又三十年ヨリコノカタト云ヘハトテ、年紀ヲサシタル様ニハアレトモ、此三十年ハ無始無終ト云ハム程ノ詞也、更不可拘^{カルカヌニ}貞^ム、然者無始ヨリコノカタ佛性也ト云心ナリ、半箇聖人(一一二-a)ト指ハ、狗子ヲ佛性ソト云詞ヲ、暫半箇トハサス歟、然而狗子モ佛性、佛性モ佛性、有モ佛性、無モ佛性ナレハ、共ニ佛性ノ外ニ毒手トテ、暫モ繫縛^{ケハグ}ノ儀不可^ム有也、

\趙州無、此無ノ詞、又不^レ被^三心得^ム、普通ニ思ナラハシタル有無ノ無ナルヘクハ、爭狗子ニ佛性無ト被^レ仰ヘキ、是不審也、又不^レ當ナリ、所詮佛性ノ自稱^{サク}スル無モ、狗子ノ自稱スル無モ、傍^{クハ}觀^{クハ}者ノ喚作^{クハシ}ノ無モ、皆恁麼道ナルヘシト被^レ釈之上ハ、佛性ヲサシテ無ト云ヒ、狗子ノトウ(一一二-b)タイヲ無ト

のかとも、學道は學道であるのかとも問うようなものである。

「あやまりて毒手にあふ、うらみふかしといへども、三十年よりこのかた、さらに半箇の聖人を見る風流なり」とある。この「毒手」のことばは、今、狗子に對して、前世の行為の報いによつて、今世に畜類の生を受けたのであると言うよう受け取られる。一往は、まさにこの意味あいもあるであろうか。もつとも、この「毒手」も、落ち着くところは仏性に相当するだろうか。また、「三十年よりこのかた」と言うからと言つて、経過年月を指しているようではあるけれども、この「三十年」は、無始無終というくらいのことばである。決して數にこだわるべきではない。そうであるから、無始よりこのかた仏性であるという意味である。「半箇」「の」聖人と指すのは、狗子を仏性だといふことばを、仮りに「半箇」と指すのか。そして、狗子も仏性、仏性も仏性、有も仏性、無も仏性であるので、同じように、仏性の外に「毒手」といつたからといって、かりそめにも繫縛の意味があるはずがないのである。

談へキ也、傍観者喚作者、今ノ趙州モ無、所問之僧モ無ナリ、無ノ究盡^{キヤウ}スル道理ヲ、今ハ

趙州ハ無ト被^ヒ仰ト可ニ心得^{ナリ}、

この無ワツカニ消石^{セウザイ}ノ日アルヘシト云々、日ノツヨク照ス時ハ消石ノ用アル也、其定ニ今佛性ノ究盡スル力量ニ皆ケサルルナリ、所詮佛性ノツヨク照ス時、佛性ノ外ニ餘物ナキ心地也、是佛性獨立^{ドリツ}ノ姿ナリ、

僧云ク、一切衆生、皆有^ニ佛性^ニ、狗子爲甚麼^{ナニトシテカ}無云云、此詞ニ聞タリ、一切衆生皆有^ニ佛性^ニト知タル（二二二-a）上ハ、趙州ニ此僧狗子ニ佛性有也無ト初テ問スル事頗^{スコソ}自語相違ノ事也、然者狗子モ佛性モ無モ一詞也ト心得ヌヘシ、隨一切衆生無ナラハ、佛性モ無ナルヘシ、狗子モ無ナルヘシト被^ヒ釈^レ之、又狗子佛性ナニトシテカ無ヲマツ事アラムト云ハ、狗子ニ佛性有也無也トハシラカハセテモ無^レ誣^シ只狗子ハ狗子、佛性ハ佛性ニテアリナムト云フノ姿也、正法眼藏ノ心地、段段ニ此意趣見タリ、佛性ノ獨立、狗子ノ獨立、如レ此談スレハカクレナキナリ、（二二二-b）

趙州云、爲他有業識在云云、爲他有業識在ト云ヘハ、ナムチ惡業^{ゴヤ}ニヨリテ今畜生ノ果ヲ得タリト云様ニ聞エタリ、爲他トサスモ佛性、

たと理解すべきである。

「『その無わづかに消石の日あるべし』とある。日が強く照らすときは「消石」の働きがあるのである。そのように、今、仏性が究尽する力量に皆消されるのである。結局、仏性が強く照らす時、仏性の外に余物がない意味あいである。これが仏性独立の姿である。

「『僧いはく、一切衆生、皆有^ニ仏性^ニ、狗子為甚麼^{ナニトシテカ}無』（一切衆生、皆仏性有り、狗子甚麼としてか無き）とある。このことばによつてわかつた。「一切衆生、皆有^ニ仏性」と知つたからには、趙州にこの僧が、狗子に仏性があるかと初めて問うことは、甚だ自らの語と相違していることである。そうであるから、「狗子」も「仏性」も「無」も一つのことばであると理解することができよう。従つて、「一切衆生無なれば、仏性も無なるべし、狗子も無なるべし」と釈かれる。また、「狗子仏性、なにとしてか無をまつことあらむ」というのは、狗子に仏性が有るのである、或いは無いのであると、中心となるものを替えてもしかたがない。ただ、狗子は狗子、仏性は仏性であるという、一つの姿である。『正法眼藏』「で説くところ」の意味あい「であり」、各段にこの意趣が見えている。仏性の独立、狗子の独立。このように説けば、見えないところがないのである。

「『趙州いはく、為^ニ他有^ニ業識在』（他に業識の在る有るが為なり）とある。「為他有業識在」と言えば、お前は惡業によつて、今、畜生の果を得たというように受け取つてしまふ。「為他」と指すのも「仏性」、「業識」も「仏性」である。だ

業識モ佛性ナリ、故ニ爲他有ハ業識、業識有、爲他有なりとも、狗子無、仏性無なり。有、爲他有也トモ、狗子無、佛性無也ト被レ釈ナリ、但爲他有ト云ニ、今無ト云ハ相違シタル様ナレトモ、此有無又不可^レ有^ニ差別^ニ、佛性ノ上ノ解脱ノ上ノ詞ナレハ、更相違ノ法トナルヘカラス、

業識イマタ狗子ヲ會セス、狗子イカテカ（二四 a）佛性ニアハム云云、是ハ已前ニ如レ談、業識ハ業識、狗子ハ狗子ト談セムト云心地也、一方ヲ證スレハ一方ハクラシト云程ノ義也、

タトヒ雙放^{サウハウ}雙收^{サウシユ}トモ、ナヲコレ業識ノ始終也云云、放收共^{ヲサム}二佛性ノ始終也ト云心地ナリ、業識ノ始終^{ヲサム}ト云ハルハ佛性ノ始終ナリ、公按多ケレトモ、趙州ノ狗子無トテ、諸禪僧賞翫シテ、此公按ヲ殊モタセ沙汰スル歟、但趙州ノ狗子無ノ公按モテアソフヘクハ、狗子有ノ公按モ可^レ翫^{モテアソブ}、無ヲ用事不^レ被^ニ（二四 b）心得^一、但情案^ニ二佛性狗子ニ無ト云ハメツラシキ詞ナル故ニ如レ此賞^シ歟、狗子ニ佛性有ト聞ハ尋常事也、仍不^レ珍^シ故不^レ賞^レ之歟、是^{シカシナカラ}併此有無ヲ世間ノ有無ニ心得タル故ニ如レ此取捨スル歟、可^レ翫^{モテアソブ}ハ何ノ詞モ可^レ賞^シ、可^レ捨ハ何ノ詞モ

から、「爲他有は業識「なり」、業識有、爲他有なりとも、狗子無、仏性無なり」と釈かれるのである。もつとも、「爲他有」と言うけれども、今、「無」と言うのと相違しているようであるけれども、この「有」「無」は、また違いがあはずがない。仏性に関しての、解脱に関してのことばがあるので、決して相違しているものとなるはずがない。

「「業識いまだ狗子を会せず、狗子いかでか仏性にあはむ」とある。これは以前に説いたように、業識は業識、狗子は狗子と説こうという意味あいである。「一方を証すれば一方はくらし」というくらいの意味である。

「「たとひ双放双收「す」とも、なほこれ業識の始終なり」とある。「放」「收」とともに「仏性の始終なり」という意味あいである。「業識の始終」と言われるのは、「仏性の始終」である。公按は多いけれども、「趙州の狗子無」と言って、諸の禅僧が賞翫して、この公按を「修行僧に」特に持たせ指示するのか。もつとも、「趙州の狗子無」の公按を賞翫しようとするならば、「趙州の」狗子有^ニの公按も賞翫すべきである。「無」「の方のみ」を引用することは理解できない。もつともよくよく考えると、仏性が狗子には無いというのは珍しいことばであるから、このように賞するのか。狗子に仏性が有ると聞くのは普通のことである。従つて、珍しくないからこれを賞さないのか。要するに、この「有」「無」を、世間「で用いるところ」の有・無に理解しているから、このように取捨するのか。翫ぶべきことばは、どんなことばも賞すべきである。捨るべきは、どんなことばも捨てるべきである。全くそのわけがわかつていないのである。正師のことば

可レ捨也、甚不レ得ニ其意ニ事也、是併不
聞ニ正師詞ニカイタス所也、可レ恨可レ恨、可レ
悲可レ悲、假令此佛法ヲ心得ムスル様、カ
ナラス漿水錢ハイカニ、草鞋錢トハナニトテ
イテクルソナムト、此詞ニ心ヲ強ニツケヌ
トモ、(二二五 a) 只理ノ方ヲ先取テ可レ心
得也、文字或詞ニノミ心ヲ付テ、トカクモ
テアツカヘハ、理ノ方ハウスクナルナリ、能
能可ニ了見一事也、

今佛性可レ有ト問取セス、ナカルヘシト問取
スルニ非スト云ト云ヘト、有無ノ詞未定ニテ
非置、有佛性也無ノ所ニ佛性ノ道理アキラ
ケキ也、

此有無ノ字可ニ心得一事、專國師ノ示給衆生
有佛性、大鷗ノ示給衆生無佛性ニ事舊又、
都有ト云モ是、無ト云モ是、是有(二二五
b) 無ニカカハラス、ヤカテ佛性ヲ有トト
キ、無トトク上ノ詞ナリ、

「ここに「仮性あるべし」と問取せず、なかるべしと問取するにあらず」とあると
いつても、有・無のことばをまだ決めないで、そのままにしておくのではない。
「有仮性也無」(仮性有りや)のところに、仮性の道理が明瞭である。

「この有無の字について理解すべきことは、もっぱら、「第八段で塩官齊安」国
師が示された「衆生有仮性」、「第九段で」大鷗「山大円禪師」が示された「衆生
無仮性」に言い古されてしまった。すべてが「有」と言うのもよい。「無」と言
うのもよい。有無にかわらない。まさに仮性を有と説き、無と説く上でのこと
ばである。

鐵漢又學道スルカト問取スト云ハ、鐵漢ト云
ハ、スカタハイタツラナル鐵ノ人ノカタチト
ハ心得マシ、學道ヲモテ鐵漢トイフト可ニ心
得、古キ詞ニ、學道ハ鐵漢ナルヘシト云事
アリ、是ヲ心得ニハ、學道ノ心ヲツヨクハケ
マセナムト云トソ心得ヌヘケレトモ、非ニ其

を聞かない者が出でる。恨むべし、恨むべし。悲しむべし、悲しむべ
し。かりにこの仮法を理解しようとする時、必ず漿水錢はどうか、草鞋錢とはど
ういうものといつて出てくるなどと、このことばにむりに心を留めたとしても、
ただ理の方をまず理解すべきである。文字或いはことばにのみ執着して、あれこ
れ取り扱えば、理の方は弱くなるのである。充分考えめぐらして判断すべきこと
である。

儀、誰か何事ヲ學シテ助法トナルヘシトニ
ハアラス、學道ハ只學道也ト心得ナリ、佛性
ニ有無ヲモタセ（二二六a）タルニアラヌ所
ヲ鐵漢學道ト仕フ、別ニ學道ノ要ニハアラサ
ルヘシ、能所ヲカシト也、學道スルカト問
取スルナリトアルハ、狗子ニ佛性有ヤ無ヤト
云ニ、有トモイハス無トモ云ハスト云所カ、
二ノモノノアハヒ取ハナツヘキ道理ナキ所
ヲ、鐵漢又學道スルカト云詞ヲ證據ニ出スナ
リ、心得マシキ故ニ如^レ此云也、

アヤマリテ毒手ニアフト云ハ、生死流轉スル
時刻ヲサス也、狗子ノ爲ニハ佛性ハ毒ナリ、
狗子ト云詞ヲ贊^{ドゲ}毒トハ云ヘトモ、佛性ト體脫
シ（一二六b）ヌル上ハ非^ニ誠^{マコナ}毒^ニ、狗子カ
佛性ニアハム^{ヨロコビ}悅^{トソ}云ヘケレトモ、毒ノカ
タヨリ恨ト仕フ、亦謗^{アガ}佛法僧ノ謗ナルヘシ、
毒手ニアフト、半箇ノ聖人ヲミルトハ、同時
ト心得也、前後ニ不^レ置事也、半箇ノ聖人ヲ
ミル風流ナリト云ハ、イマ佛道ニアフナリ、
傍觀者ノ喚^{クワシソ}作ノ無ト云ハ、傍觀者トハ趙州
并問者ノ僧ナムトヲ可^レ指歟、但傍二人アル
ヘキニ非ス、傍觀者カヤカテ無ニテアレハ、
別ニ傍觀者（一二七a）不可^レ置^一也、

「あやまりて毒手にあふ」というのは、生死流転する時刻を指すのである。狗子のためには仮性は毒である。狗子ということばを、仮りに「毒」とは言うけれども、仮性と体脱したからには、本当の毒ではない。狗子が仮性にあう悦びというべきであるけれども、毒の方からは「うらみ」と使う。「亦謗^{アガ}佛法僧」の「謗^{アガ}」であろう。「毒手にあふ」と「半箇の聖人を見る」とは同時と理解するのである。前後におかないとある。「半箇の聖人を見る風流なり」と言うのは、今、仏道にあう「ということ」である。

「傍觀者^ノ喚^{クワシソ}作ノ無ト云ハ、傍觀者トハ趙州并問者ノ僧ナムトヲ可^レ指歟、但傍二人アルヘキニ非ス、傍觀者カヤカテ無ニテアレハ、別ニ傍觀者（一二七a）不可^レ置^一也、

「自称」の「無」（仮性の自称する無）は、結局「仮性」の「無」でもない。「狗子ノ無ハ所詮佛性ノ無ニテモナシ、狗子ノ

無ニテモナシ、タタ自稱ノ無ニテアル時ニ、
奥ニモ消石ノ日有ト云フ、ノコサスキユルユ
ヘナリ、

業識有ト云ハ、常凡コレ無常ナリ、常聖コレ
無常也、常凡聖ナラムハ佛性ナルヘカラスト
云程ニ心得也、業識イマタノコレリトモ佛性
ナルヘシト云ニハ非ス、ヤカテ業識有ト云ハ
ルル時カ佛性ニテアルナリ、

業識未狗子ヲ會セスト云ハ、業識ノ不會ハ
(二二七b) 狗子也ト云也、狗子ノ不逢ハ佛
性也ト心得ナリ、一方ヲ證スレハ一方ハクラ
シト說程ニ、業識トモ佛性トモ狗子トモ云ハ
ルルナリ、

「『業識有』と言るのは、「第六段の」「常聖」これ無常なり、常凡これ無常なり。
常凡聖ならむは、仮性なるべからず」というくらいに理解するのである。業識が
まだ残っているけれども仮性であろうというのではない。まさに「業識有」と言
われる時が仮性であるのである。

「『業識いまだ狗子を会せず』というのは、「業識」の不会(会せず)は「狗子」
であるというのである。「狗子いかでか仮性にあはむ」というのは「狗子」の
不逢(いかでか……あはむ)は「仮性」であると理解するのである。「一方を証す
れば一方はくらし」と説くくらいに、「業識」とも、「仮性」とも、「狗子」とも
言われるのである。

「双放双收」とも」というのは、会・不会の意味を述べるのである。会も
不会も「業識の始終」であるから。「双放」ということばは、「業識いまだ狗子を
会せず、狗子いかでか仮性にあはむ」ということばにあたるはずである。「双收」
といふことばは、「狗子無仮性」の「無」にあたる。「業識有」「為他有」等にあ
たるはずである。

(1) 『正法眼藏三百則』卷中 第一四則。

僧問「趙州」、狗子還有「仮性」也無。州云、有。僧云、既有、為「什麼」卻撞入這箇皮袋。州云、為他知而故犯。有僧問、狗子還
有「仮性」也無。州云、無。僧云、一切衆生皆有「仮性」、狗子為「什麼」卻無。州云、為伊有「業識在」。(『全集』下・二二二頁)

この則は『宏智頌古』第一八則（正藏四八・二〇a）にある。後半の傍線を引いた部分が第十二段で、線を引かなかつた前半が次の第十三段で扱われる。

(2) 『宗門聯燈会要』卷一三 李遵勗章。

作レ頌云、學道須ニ是鐵漢、著ニ手心頭ニ便判、直趣ニ無上菩提、一切是非莫レ管。（続藏一三六・三二二C）

(3) 『全集』は「ゑ」とするが、『抄』(一一二a)によつて「へ」に改めた。

(4) 『景德伝燈錄』卷一四 三平義忠章。

石輩常張弓架箭以待学徒。師詣法席。輩曰、看箭。師乃撥開胸云、此是殺人箭。活人箭又作麼生。輩乃扣弓弦三下。

師便作礼。輩云、三十年一張弓兩隻箭、只謝得半箇聖人。遂拗折弓箭。（正藏五一・三二六b）

(5) 『全集』は「か」を欠くが、『抄』(一一三b)によつて補つた。

(6) 『抄』(一一四b)『聞書』(一一八b)は「す」を欠くが、改めなかつた。

(7) 『抄』(一一四b)は「を」とするが、ここでは改めなかつた。

(8) この前までが『抄』で、ここからが『聞書』である。

(9) 仏性の卷第九段。

百丈いはく、説^ミ衆生有^ニ仏性^一、亦謗^ニ仏法僧^一。説^ミ衆生無^ニ仏性^一、亦謗^ニ仏法僧^一。しかあればすなはち、有仏性といひ、無仏性といふ、ともに謗となる。謗となるといふとも、道取せざるべきにはあらず。（『全集』上・二八頁）

第十三段

趙州⁽¹⁾、有僧問^フ、「狗子還有^ニ佛性^一也無^一。」

この問取は、この僧構得趙州の道理なるべし。しかあれば、佛性の道取問取は、佛祖の家常茶飯なり。

趙州いはく、「有[。]」

この有の様子は、教家の論師等の有にあらず、有部の論有にあらざるなり。すすみて佛有を學すべし。佛有は趙州

有なり、趙州有は狗子有なり、狗子有は佛性有なり。

僧いはく、「既^ニ有^フ、爲^ニ甚^ニ却^ニ入^フ這皮袋[。]」

この僧の道得は、今有なるか、古有なるか、既有なるかと問取するに、既有は諸有に相似せりといふとも、既又有孤明なり。既又有は撞入すべきか、撞入すべからざるか。撞入這皮袋の行履、いたづらに蹉過の功夫あらず。

趙州いはく、「爲^ニ他知而故犯^一」

この話は、世俗の言語として、ひさしく途中に流布せりといへども、いまは趙州の道得なり。いふところは、してことさらおかすとなり。この道得は疑著せざらむ、すくなかるべし。いま一字の入あきらめがたしといへども、入之一字も不用得なり。いはんや欲識庵中不死人、豈離只今這皮袋⁽³⁾なり。⁽⁴⁾不死人はたとひ阿誰なりとも、いづれのときか皮袋に莫離なる。故犯はかならずしも入皮袋にあらざれども、撞入這皮袋かならずしも知而故犯にあらず。知而のゆへに故犯あるべきなり。するべし、この故犯すなはち脱體の行履を覆藏せるならむ。これ撞入と説著するなり。脱體の行履、その正當覆藏のとき、自己にも覆藏し、他人にも覆藏す⁽⁵⁾。しかもかくの「ことくなりといへども、いまだのがれずといふことなけれ、驢前馬後漢。

いはんや雲居高祖いはく、たとひ佛法邊事を學得する、はやくこれ錯用心了也⁽⁶⁾。しかあれば、半枚學佛法邊事、ひさしくあやまりきたること日深月深なりといへども、これ這皮袋に撞入する狗子なるべし。知而故犯なりとも有佛性なるべし。

此問ノ意如何、佛言一切衆生悉有佛性ト被仰、此上ハ初テ狗子ニ佛性有カト問セム事不^レ被心得^ニ不審事也、但此有無ノ詞、先先事舊了、隨コノ問取ハ、此僧構得趙州ノ道理ナルヘシトアリ、趙州ノ心地ヲ能心得テ問取スル也、然者得^ニ解脫理^ニ僧ト心得ヘキカ、

この問の意味はどうであろうか。「第一段で」「仏言、一切衆生悉有佛性」とおっしゃられた。そうであるからには、改めて狗子に仏性が有るかと尋ねることは理解できない。よくわからぬことである。しかしながら、この有無のことばは、以前言いふるされた。そうであるから、「この問取は、この僧構得趙州の道理なるべし」とある。趙州の考えをよく理解して「この僧は」「問取」するのである。そうであるから、解脱の理を得た僧と理解すべきか。

趙州云、有、此有様如^レ文可^ニ心得^一、僧云、既^{*}有、爲^ニ甚^ニ麼^モ却^ニ撞^ニ入^レ這^ニ皮袋^{云々}（二二八^{スヂニ}ナニトシテカ タウニクスモヨヒ タイニ）

b) 此詞ヲ打任テ心得ツヘキ様ハ、既^ニ狗子ニ佛性アリ、何トシテ業力所感ノツタナキ這皮袋ニ^ハ撞入スルソト、不審シタル様ニ聞ユ、シカニ^ハアラス、其故ハ此有ハ今有ニアラス、古有ニアラス、既^ニ有也、故^ニ孤明也ト被^レ釈上ハ、普通ノ有無相對ノ有ニ非ル上ハ、ヨノツネニ疑ハム更不可^レ當、既^ニ有ノ有ノ道理ハ撞入スヘキカ不可^レ撞入^ニ歟、能能可^ニ了見^ニ也、此道理カ撞入ストモ撞入セストモイハルル也、故^ニ這皮袋ノ行履、イタツラニ蹉過ノ功夫アラストハイハルルナリ、(二二九a)

趙州云、爲^ニ他知而故犯^ニ云云、乍^レ知犯ハ殊其咎重シ、然而今ノ知而故犯ハ非^ニ此儀^ニ、爲^ニ他知而故犯ヲハ^ニ狗子ニ仰テ心得ヌヘシ、知ナカラ犯ス故、狗子ト成ト心得ヌヘシ、但爲^ニ他モ佛性、知モ佛性、故犯モ佛性也ト心得ヌル上ハ、此詞ニハ不可^レ迷、是ヲサシテ、コノ道得ハ、疑著セサラム、スクナカルヘシトハカカレタルナリ、打任テ人ノ思タル白見^ヲ指ナリ、

入するや)とある。このことばを普通一般に理解するにちがいない方向は、「既」に^ニ狗子に^ニ佛性は「有」る「のだが」、どうして(為甚麼)業力所感のみつともない「這」の「皮袋」に「撞入」するのかと、疑わしく思つて^ニいるよう^ニ受け取られる。そうではない。そのわけは、この「有」は「今有」ではない。「古有」ではない。「既^ニ有」である。だから「孤明」である釈かれるからには、普通の有無相對の有ではないからには、^ニく普通に疑うのは決して当らない。「既^ニ有」の有の道理は、「撞入すべきか、撞入すべからざるか」と、充分に考えるべきである。この道理が「撞入す」とも「撞入せず」とも言われるのである。だから、「這皮袋の行履、いたづらに蹉過の功夫あらず」と言われるるのである。

「趙州いはく、爲^ニ他知而故犯」(他、知りて故に犯すが為なり)とある。知りながら犯すのは、とりわけその咎は重い。そうではあるが、この「知而故犯」はこの意味ではない。「爲^ニ他知而故犯」を^ニ狗子に負わせて理解できよう。知りながら犯すのであるから、^ニ狗子と成つたと理解できよう。しかしながら、「爲^ニ他」も^ニ佛性、「知」も^ニ佛性、「故犯」も^ニ佛性であると理解したからには、このことばには迷うべきではない。これをきして、「この道得は、疑著せざらむ、すくなかるべし」と書かれたのである。普通一般に人が思つて^ニいるかたよつた見解を指すのである。

イマ一字ノ入アキラメカタシト云ヘトモ、入之一字モ不用得也云云、入ト云詞、能所ヲ立て(二二九b)是カ彼^ニ入トコソ心得ルニ、此入ハ以^ニ狗子^ニ入ト仕ヒ、以^ニ佛性^ニ入ト談

ス、這皮袋又入也、仍此入不用得ノ入也、涅槃經不斷煩惱而入涅槃ト云文ヲ、口ウ瀧居士入之一字不用得也ト心得タリキ、不斷煩惱ノ當體コソヤカテ而入涅槃ニテアレ、是入不入ニカカハラサル義也、

欲識庵中不死人、豈離只今這皮袋云、是ハ石頭和尚歌ナリ、庵中不死人トハ石頭歟、盡十萬界真實人跡ノ人ヲ以テ不死人トハ指ナリ、只今這皮（二三〇a）袋ト云モ、今ノ石頭ノ姿歟、今皮袋ト云詞ノ出クル付テ此詞ヲ被取出歟、縱石頭ニカキルヘカラス、阿誰ナリトモ皮袋ニ莫離ナルト云心ナリ、

故犯ハ必シモ入皮袋ニアラサレトモ、撞入這皮袋カナラシモ知而故犯ニアラス、知而ノユヘニ故犯アルヘキナリ云云、是ハ故犯ナラハ故犯、入皮袋ナラハ入皮袋、撞入ナラハ撞入ナルヘシトナリ、例一方ヲ證スレハ一方ハクラシト云心ナリ、サレハトテ故犯ヲ（二三〇b）賞シテ、入皮袋ヲ棄置セムノ儀ニテハナシ、故ニ知而ノユヘニ故犯アルヘキ也トハ云ナリ、

シルヘシ、此故犯スナハチ脱體ノ行履ヲ覆藏セルラム、コレ撞入ト說著スルナリ文、此故

の「不斷煩惱而入涅槃」（煩惱を断ぜずして涅槃に入る）という文を、龐蘊居士は「入之一字も不用得なり」⁽⁹⁾と理解した。「不斷煩惱」の当體が、ほかならぬ「而入涅槃」である。これは「入」「不入」にかかわらない意味である。

「「欲識庵中不死人、豈離只今這皮袋」（庵中の不死の人を識らんと欲せば、豈に只今、遮の皮袋を離れんや）とある。これは石頭希遷和尚の『草庵』歌⁽³⁾である。「庵中不死人」というのは石頭のことか。尽十萬界眞實人体の人を「不死人」と指すのである。「只今這皮袋」というのも、この石頭の姿か。ここに「皮袋」ということばが出てくるので、この「石頭の」ことばを取り出されたのか。「たとひ」—石頭に限るべきではない—「阿誰なりとも」「皮袋に莫離なる」という意味である。

「「故犯はかならずしも入皮袋にあらざれども、撞入這皮袋かならずしも知而故犯にあらず。知而のゆへに故犯あるべきなり」とある。これは、もし「故犯」であるならば「故犯」、「入袋皮」であるならば「入皮袋」、「撞入」であるならば「撞入」であろうと言うのである。たとえば、「一方を証すれば一方はくらし」という意味である。そうであるからと言つて、「故犯」を貰めて、「入皮袋」を棄て置こうとするのではない。だから「知而のゆへに故犯あるべきなり」と言うのである。

「「しるべし、この故犯すなはち脱體の行履を覆藏せるならむ。これ撞入と說著するなり」。この「故犯」はすなわち仏性である。仏性に皆「覆藏」されて、仏

犯スナハチ佛性ナリ、佛性ニ皆覆藏セラレテ、佛性ノ外ニ無^ミ餘物「心地ナリ、覆藏スト云ヘハトテ、雲ノ月ヲヲヒタルニテハナシ、全佛性ノ道理ヲ覆トハ心得ナリ、

脱體ノ行履、ソノ正當覆藏ノトキ、自己ヲモ覆藏也、他人ヲモ覆藏ス、シカモ如レ此也（二三一-a）ト云ヘトモ、イマタノカレスト云事ナカレ、驢前馬後漢文、脱體ノ故犯正當覆藏ノ時ハ、自己ヲモ覆藏シ、他人ヲモ覆藏ス、自他ヲ超越シ、自他ニカカハレサル心也、驢前馬後漢トハ、只驢前馬後トハ云ヘトモ、只馬ノ上ノ前後也、故ニ自トモ他トモ、故犯トモ知而トモ、撞入這皮袋トモ仕ヘ、皆佛性ノ上ノ莊嚴也ト可^ニ心得^一、只同物ナル故也、

云居高祖曰、タトヒ佛法邊事ヲ學得スル、ハヤクコレ錯用心了也^{アヤマチヨウシラヘルト}云云、佛法邊事ト（二三一-b）云事ハ偏正ヲ立テ云時ハ、偏ハ正ニハトツカヌ心地也、付居所^ノ云ニモ、京中邊土ナント云テ、ハルカニ異ナリ、是ハ其心地ニテハアルヘカラス、又錯用心了也ト云フ、アヤマリアシキ様ニキコユ、非^レ爾、佛法ニハ將錯就錯トテ、錯ヲ解脱ノ詞ニ仕フ、今ノ錯用心了也トハ、所證佛性ヲサスト心得ヘ

性のほかに余物がない意味あいである。「覆藏す」とあるからといって、「たとえば」雲が月を覆つてしまつた「というようなことを言う」のではない。全て仏性である道理を「覆」と理解するのである。

「脱体の行履、その正当覆藏のとき、自己にも覆藏し、他人にも覆藏す。しかも多くのごとくなりといへども、いまだのがれずといふことなけれ、驢前馬後漢」。「脱体」の故犯、「正当覆藏のとき」は、自己をも覆藏し、他人をも覆藏する。自他を超越し、自他にかかわらない意味である。「驢前馬後」とは、単に「驢前馬後」とは言うけれども、ただ馬の前後である。だから、「自」とも「他」とも、「故犯」とも「知而」とも、「撞入這皮袋」とも使いなさい。皆仏性の上の莊嚴であると理解すべきである。ただ同じ物だからである。

「云居高祖いはく、たとひ仏法邊事を學得する、はやくこれ錯用心了也」とある。「仏法邊事」ということは、偏正を立てて言うときは、偏は正には及ばない意味あいである。居所に関して言う時でも、京中辺土などと言つて、「京中と辺土とは」はるかに異なつてゐる。これはその意味あいではあるはずがない。また、「錯用心了也」（錯つて用心したる）とある。間違つていて、よくない様子に受け取られる。そうではない。仏法では「将錯就錯」（錯を将つて錯に就く）と言つて、「錯」を解説のことばとして使う。⁽¹⁰⁾この「錯用心了也」とは、結局仏性を指すと理解すべきである。

シ、

半枚學佛法邊事、ヒサシクアヤマリ來事日深月深也ト云ヘトモ、コレ這皮袋ニ撞入スル狗子ナルヘシ文、半枚ノ詞非^{シャビタ}不足^{タク}、又多小ノ儀ナシ、佛法邊事半枚（二三二-a）學佛法トハ、佛性ノ至極無邊際ト云心地也、日深月深也トハ、積功累德ノ心地也、此道理ヲ以テ、結スル句ニ知而故犯也トモ有佛ナルヘシトアルナリ、

趙州⁽¹¹⁾ノ答ハ、狗子ニ佛性有トモ無トモ不^レ被^レ仰、狗子ノ沙汰ハナクテ、タタ有ト被^レ仰歟ト心ヲツクヘシ、

教ニハ一佛ノ上ニ昨日說^ニ定法^一、今日ハ說^ニ不定法^一、此門ニハ不^レ說^カ權實邪正^ニ、唯一佛法ナリ、（二三二-b）

六祖與^ニ行昌^ニ問答ニ、草木叢林^{ノクワツ}ノ無常ナル、スナハチ佛性也、人物身心國土山河ノ無常ナル、コレ佛性也ト云テ、佛性ヲアラハシ、常凡聖ナラムハ、佛性ナルヘカラスト云カ如ク、有ニモ孤明ト云フ詞ヲツケヌレハ佛性ナルヘシ、

齊安國師段ニ、有心者皆衆生ナリ、心是衆生ナルカユヘニ、無心者ヲナシク衆生ナルヘシ、衆生是心ナルカ故ニ、シカアレハ心皆コ

ヘ「半枚學仏法邊事（半枚仏法邊の事を学す）、ひきしくあやまりきたること日深月深なりといへども、これ這皮袋に、撞入する狗子なるべし」。「半枚」のことばは足りないということではない。また、多い少ないの意味はない。「仏法邊事」「半枚學仏法」とは、仏性がこの上なく無邊際であるという意味あいである。「日深月深なり」とは、積功累徳の意味あいである。この道理によつて、結びの句に、「知而故犯なりとも有仏性なるべし」とあるのである。

「趙州の答は、狗子に仏性が有るとも無いともおっしゃられない。狗子についての論義はなくて、ただ「有」とおっしゃられたのかと氣付かせるべきである。

「教家では、一仏の上に昨日は定法を説き、今日は不定法を説く。⁽¹²⁾ この宗門では、權實邪正を説かない。ただ一仏法である。

ヘ「第六段の」六祖と行昌の問答で、「草木叢林の無常なる、すなはち仏性なり。人物身心「の無常なる、これ仏性なり。」国土山河の無常なる、これ仏性「なるによりて」なり」と言つて仏性をあらわし、「常凡聖ならむは、仏性なるべからず」というように、「既には孤明なり」と「有」にも「孤明」ということばを受けたから仏性であろう。

ヘ「第八の」齊安国師の段に、「有心者みな衆生なり、心是衆生なるがゆへに。無心者をなじく衆生なるべし、衆生是心なるがゆへに。しかあれば、心みなこれ衆生なり、衆生みなこれ有仏性なり。草木国土「これ」心なり。心なるがゆへに。

レ衆生也、衆生皆コレ有佛性ナリ、草木國土心也、心ナルカ故ニ衆生也、衆生ナルカ故有佛性也トモイフ、(二三三三 a) 孤明トイフ詞ニ心得合スヘシ。

既\有爲甚\麼却撞入這皮袋ト云詞ハ、清淨本然、云何忽生山河大地⁽¹³⁾セムト云ホノ詞ト心得ナリ、不斷凡惱而入涅槃ト程ナリ、既\有ノ全面力撞入這皮袋ナル也、撞入ト云詞ハ佛性ニ付ティハルル詞ナリ、孤明ナリト云上ハ、撞入ノ沙汰不可^レ有トコロヲ、撞入スヘキカスヘカラサルカト云、出入スヘキニアラス、今ハ孤明ノ撞入ナリ、(二三三三 b)

「既\有、為甚\麼却撞入這皮袋」(既に有らば、甚\麼と為てか却^{また}這の皮袋に撞入するや)といふことばは、「清淨本然、云何忽生山河大地⁽¹³⁾」(清淨本然、云何んが忽ち山河大地を生ぜん)というほどのことばと理解するのである。「不断煩惱而涅槃⁽¹⁴⁾」(煩惱を断ぜずして涅槃に入る)というほどである。「既\有」のすべての面^が「撞入這皮袋」であるのである。「撞入」ということばは仏性に關して言われるほどである。「孤明なり」というからには、「撞入」について論議することがあるはずがないところを、「撞入すべきか、【撞入】すべからざるか」と言う。出入すべきではない。ここでは、「孤明」の「撞入」である。

趙州云、爲他知而故犯、知而ノユヘニ犯ハイテク、シカアレハ犯ハ知ナルヘシ、知ナラハ又犯モ世間ニ云ヲカシニアラス、錯ト云モ就錯程ノアヤマリ、謗ト云モ說衆生有佛性、亦謗佛法僧程ノ犯ナレハ、ヲカシト難^レ云、知而故犯ハ、タトヘハ佛ハ佛也ト云程ノ事也、故犯ノイテクル事ハ、既\有爲甚\麼却撞入這皮袋ト云詞カ、知而故犯ニテハアルナリ、知而故犯ナラヌ佛性ノ詞ハアルヘカラス、三界唯一心モ、諸法實相モ知而故犯也、知而故犯ハ(二三四 a) 非^レ德失儀⁽¹⁵⁾、佛ナルユヘニ佛

衆生なり、衆生なるがゆへに有仏性なり」とも言う。「孤明」ということばに心得合わせるべきである。

也ト云カ如シ、知而故犯ハ、悟ニ大迷也ト云程ノタケ也、

欲識庵中不死人ト云ハ、不死トイヘハ生死ニウツサレヌ人也、生死ヲ離ハ、又庵中ニハ争居ルヘキ、シカアレハ庵モ世間ノ庵ニハアラス、人モ盡十方界眞實人跡ノ人ナルヘキカ、庵モ解脱ノ庵、盡界ナルヘキ歟、豈離只今這皮袋也ト云フ、此這皮袋ハ、我等カ事ナルヘキカ、然者又不死人トハ難^レ云ヲ、只今ノ這皮袋ヲ不死人トシレハ、這皮(二三四b)袋ノカタヨリ不死人トシル也、這皮袋ナカラハ、シラレサレハ、這皮袋ヲハナルニテアルナリ、

皮袋ニ莫離^{モリ}ナルトアル時ニ、ハナレサル様ニキコユレトモ、何ノ時カハナルル事ノナカラムト云ト可^ニ心得^ニ、莫離ト云詞、佛性狗子ナリ、

知而ハ欲識庵中不死人ニアタルヘシ、故犯ハ豈離^{*モリ}只今這皮袋ト云ハルルカ、但所詮ハ知ノ犯ナレハ知ノミ也、コノ知、邪見妄見ノ知ニアラス、犯モアヤマリヲカス犯ニ非ス、ユヘニ(二三五a)知而ナレハ故犯トイハルル也、

公按の巻の」「悟に大迷なり」というほどのことである。

「「欲識庵中不死人」(庵中の不死の人を識らんと欲せば) というのは、生死に流されない人である。もし生死を離れたならば、その上、庵中にどうして居なければならぬのか。そうであるから「庵」も世間「で言う」庵ではない。「人」も尽十方界真実人体の人であろうか。「庵」も解脱の庵、尽界であろうか。「豈離只今這皮袋(豈に只今、遮の皮袋を離れんや)なり」という。この「這皮袋」は、我々のことであろうか。そうであるならば、また「不死人」とは言いたいが、「只今」の「這皮袋」を「不死人」と知るから、「這皮袋」の方より「不死人」と知るのである。「這皮袋」がないならば知られないから、「這皮袋」を離れるのである。

「「皮袋に莫離なる」とあるときに、離れない状態として受け取られるけれども、どんな時に離れることがないであろうと言つてはいるが理解すべきである。「莫離」ということばは、「仏性」「狗子」である。

「「知而」は「欲識庵中不死人」にあたるはずである。「故犯」は「豈離只今這皮袋」と言われるのか。しかしながら、結局は「知」が「犯」であるから「知」だけである。この「知」は、邪見・妄見の知ではない。「犯」も、あやまりをとかす「という意味の」犯ではない。だから、知而であるから故犯(知而のゆへに故犯)と言われるのである。

「「犯」と一旦言われるのは、仏性でありながら、狗子と言われるところを指す犯ト一旦イハルルハ、佛性ニテハアリナカ

ラ、**狗子トイハルル所ヲサスナリ**、

のである。

此故犯則脱體ノ行覆ヲ覆藏セルナラムト云、此覆藏ハ、佛性海ノ段^{ノグ}ニ、佛性海ノ朝宗^{チヤウゾウ}ニ墨礎スル物也ト云シ程ノ覆藏ト可ニ心得^{フサウ}、盡界ヲ覆藏セム袋ハ盡界ノ外ニアルヘキ歟、覆藏ノ置所ナシ、イタツラニ無明カ法性ヲヲラフカ如ニ不可^レ思、佛性カ佛性ヲ覆也、覆藏力覆藏ヲヲライカクス也、(二三五b)

三界ヲ脱體スレハ一心、一心ヲ覆藏スルハ三界ナルヘシ、

脱體覆藏知而故犯**狗子**ソ佛性ソナムトガヒトシウシテ別ナキ事ヲ、今驢前馬後漢トハイハルルナリ、

雲居ノ錯用心ハ故犯也、アヤマリトハ、先段ニ這皮袋ニ撞入スル**狗子**ヲサス、**狗子**ハ佛性也ト云程ノアヤマリ也、**狗子**佛性ノ道理ヲアキラメタル知而故犯ナレハ、有佛性ナルベシトハ云ナリ、**佛法邊事**ノ學得ハ(二三六a)知而ニアタル、錯用心了也ハ故犯ニ當ヘシ、謗ハナキニアラスト云程ノ故犯也、

半枚學佛法邊事、ヒサシクアヤマリキタルト云ハ、アヤマリニテナシ、半枚ト云ヘハ、全枚ノアリテ不^レ及所ヲ半ト云ニアラス、ユヘニ這皮袋ニ撞入スル**狗子**ナルヘシ、知而故犯

「「この故犯すなはち脱体の行覆を覆藏せるならむ」とある。この「覆藏」は、「第三の」仏性海の段に、「仏性海の朝宗に墨礎するものなり」と言つたほどの「覆藏」と理解すべきである。尽界を覆藏する袋は、尽界の外にあるべきか。「覆藏」の置き場所がない。わけもなく無明が法性を覆うように思つてはいけない。仏性が仏性を覆うのである。「覆藏」が「覆藏」を覆い藏すのである。

「三界を「脱体」するので一心、一心を「覆藏」するのは三界であろう。

「「脱体」「覆藏」「知而故犯」「**狗子**」「**仏性**」などが同じであつて別でないことを、ここでは「驢前馬後漢」と言われるのである。

「「雲居」の「錯用心」は「故犯」である。あやまり（錯）とは、先の段の「這皮袋に撞入する**狗子**」を指す。「**狗子**」は仏性であるといふほどのあやまり（錯）である。**狗子**仏性の道理を明らかめた「知而故犯」であるから、「有佛性なるべし」と言うのである。「**佛法邊事**」の「學得」は「知而」にあたる。「錯用心了也」は「故犯」にあたるはずである。「第九段の」「謗は「すなはち」なきにあらず」というほどの「故犯」である。

「「半枚学佛法邊事（半枚佛法邊の事を学す）、ひさしくあやまきたる」と言ふのは、あやまりではない。「半枚」と言ふときは、全枚があつて及ばないところを半と言ふのではない。だから、「這皮袋に撞入する**狗子**なるべし。知而故犯な

也トモ有佛性ナルヘシト云也、但半枚ト云半ノ字、非^レ無^レ謂、錯用心ト云方ト、知而故犯也トモ有佛性ナルヘシト云方トヲ^{アフ}分テ、半枚トハ仕フナリ、(一一三六-b) 脱體ノ行履、ソノ正當覆藏ノトキ、自己ニモ覆藏シ、他人ニモ覆藏スト云詞ヲノヘラルルニ、シカモ如^レ此也ト云ヘトモ、未ノカレストハ有也、覆藏スレトモ脱體ノ行履ハノカレスト也、ソレヲココニモ积シクタシテ、半枚トハ云也、脱體ノ方、覆藏方、半枚學佛法也、(一一三七)

a)

りとも有佛性なるべし」と言うのである。もつとも、「半枚」という半の字は、「用いられる」理由がないわけではない。「錯用心」という方と、「知而故犯なりとも有佛性なるべし」という方とを分けて、「半枚」と使うのである。「脱體」の行履、その正当覆藏のとき、自己にも覆藏し、他人にも覆藏す」ということばを述べられるのに、「しかもかくの^レとくなりといへども、まだのがれず」とあるのである。それを「ここでも积き下して「半枚」というのである。「脱體」の方、「覆藏」の方、「それぞれ」「半枚學佛法」である。

- (1) 第十二段注(1) 参照。
- (2) 『全集』は「構」とするが、『抄』(一一一八-b) によって「構」に改めた。
- (3) 『石頭和尚草庵歌』(『景德伝燈錄』卷三〇、正藏五一・四六一C)
- (4) 『全集』は「あらず」とするが、『抄』(一一三〇-b) によって「あらざれども」に改めた。
- (5) 『抄』(一一三一-a) は「自己ヲモ覆藏ス」とするが、『聞書』(一一三七-a) によって改めなかつた。
- (6) 『宗門聯燈会要』卷二二 雲居道膺章。

示衆云、汝等直饒学^レ得仏法辺事^レ、早是錯用心了也。(続藏一三六・三九九a)

- (7) 総持寺本・万福寺本(聞書、『蒐成』一二一・六五-a)には「白見^{ヒヤク}」、眉山本には「白見^{ヒヤク}」とする。もとは「僻見^{ヘキヤク}」であったものが「僻見^{ヒヤク}」となり、更に「白見^{ヒヤク}」となつたのではないであろうか。本文は改めなかつたが、訳では「僻見^{ヘキヤク}」として訳した。
- (8) 「ト云文ヲイウ」とあり、総持寺本も同じであるが、玉林寺本・寛政五年写本・万福寺本(聞書、『蒐成』一二一・六五-b)は「ト云文ヲ」とし、万福寺本(秘鈔、『蒐成』一二一・四三二-c)は「ト文」とし、眉山本は「ト云文ヲローウ」する。こ^レは「ト云文ヲロウ」

とすべきであろう。「ロウ」は龐蘊居士の「龐」を「ろう」と読んで片仮名で表記したものと考えられる。ここでは本文を改めた。

(9) 『正法眼藏三百則』卷中 第三九則。

仰山問_二陸郎中_一、承聞郎中看經得悟、是否。云、是。弟子看_二涅槃經_一道、不斷煩惱而入_二涅槃_一。師、暨_二弘子_一云、只如_二這箇_一、作麼生入。陸云、入之一字也不用得。師云、入之一字、不為郎中。陸便起去。(『全集』下・二二七頁)

『宗門統要集』卷五(一四b)、『宗門聯燈会要』卷八(續藏一三六・一八三b) 章にもある。

『抄』は「入之一字也不用得」を龐蘊居士(一八〇八)のことばとし、行仏威儀の巻の『抄』でも、「入之一字ハ、龐蘊居士カ古キ詞也」(『蒐成』一一・三三〇a)と注釈しているが、これは明らかに陸郎中、すなわち陸希声(一八九一)の誤りである。陸希声は蘇州吳県の人で、仰山の塔銘を撰している(石井修道『宋代禪宗史の研究』大東出版、一九八七年一〇月、一三九頁)。『道元禪師全集』卷五、春秋社、一九八九年九月、二〇〇頁)。ここでは誤りは誤りのままにしておいた。

(10) 「錯」を解脱のことばとして解釈する例は、即心是仏の巻の『抄』にも次のように見られる。

仏祖_二、いまだまぬかれず保任しきたれるは、即心是仏のみなり。しかあるを、西天には即心是仏なし、震旦にはじめてきけり。学者おほくあやまるによりて、將錯就錯せず。將錯就錯せざるゆゑに、おほく外道に零落す。(『全集』上・四二頁)
將錯就錯トハ、打任テハアヤマリト云詞ニツキテハ、アシクナリタルヤウニ心得ヘキニ、此アヤマリハ解脱ノ詞也、實ニモ仏ヲ誰人カナニトアヤマルヘキゾ、イハハ今ノ即心是仏ノ理カ將錯就錯トハ云ハルヘキ歟、ユヘニ、將錯就錯セサルユヘニ、多外道ニ零落スト云也、然者凡夫ノ思ナラハシタルアヤマリニ非サル道理顯然也、(『蒐成』一一・三〇一a-b)

(11) この前までが『抄』で、ここからが『聞書』である。

(12) 『宗門聯燈会要』卷一 世尊章。

世地因道問、昨日說_二何法_一。云說_二定法_一。外道云、今日說_二何法_一。云說_二不定法_一。云昨日說_二定法_一、今日何故說_二不定法_一。

(13) 『嘉泰普燈錄』卷三 長水子璿章。

值_二上堂_一次出問、清淨本然、云何忽生_二山河大地_一。瑤憑陵答曰、清淨本然、云何忽生_二山河大地_一。(續藏一三七・三八b-c)
これは、谿声山色の巻(『全集』上・二一八頁)でもとりあげている。

(14) 注(9) 参照。

(15) 「徳失」は、「得失」の誤りであろう。訳では「得失」に改めた。

〔付記〕 本稿とは何ら関係はないが、『天童如浄和尚錄』に収められていない如浄禪師の語を、最近発見したので、ここに紹介しておくことにしたい。それは「智覺禪師贊」と言われるものである。智覺禪師とは永明延寿（九〇四—九七五）のことである。この贊を『勅賜雪竇資聖禪寺誌』卷六下（一一丁左—一二丁右）と、『四明翠山禪寺志略』卷四（『中國仏寺志彙刊』第三輯第一三冊、丹青図書公司、一九八五年一一月、一一七頁）の二つの資料の中に見い出した。「智覺禪師贊」が両寺誌に収められているのは、延寿が雪竇寺に住したことと、翠山寺に住していた翠巖令參について得度したことによるのであろう。両寺誌には、如浄禪師以外の作者による「智覺禪師贊」も収められているので、作者をその所載順に示せば次のようである。

雪 竇 寺 誌

翠山寺志略

智覺禪師贊 陳 瑞證忠
齋

陳忠肅瑞智覺禪
師像贊

其 二 覚範洪

覺範禪師慧洪前題
智覺禪
師象贊

其 三 住天童如浄

長翁禪師如淨智覺禪
師象贊

『雪竇寺誌』は康熙二〇年（一六八一）頃の刊行であり、『翠山寺志略』は康熙四四年（一七〇五）よりも後で、康熙年中（一一七二二）の成立であるから、両寺誌の成立年時はそれほど隔たっていないと推測する。如浄禪師の「贊」であることを証明するものはないが、「智覺禪師贊」として他の二人の贊とともに当時伝わり、知られていたのであろう。次にその贊を『雪竇寺誌』により示し、『翠山寺志略』と対校した。

道大德尊宗通眼活。萬象森羅熾然而說。遊嬉性海而一波不驚。披露覺天而十日並實。天台韶國師。命世之甯馨作兩浙錢大主。福田之利益至於秉五色筆。發佛祖潛光。鼓無絃琴起。衲僧痼疾。高風遠度。豐功偉績。豈片言隻字贊歎之所能及。咦。面目分明不覆藏。西湖水映中巖月。

①然一狀 ②並一竝 ③甯一寧 ④絃一弦 ⑤映一暎 ⑥巖一嵒

（一九九〇・六・二九）